

## 看護師への道・・・それは母からの贈り物

中村 章江

天国にいる母は、私が看護師になった事をどう思っているだろうか。「えっ？あなたが看護師？」と、驚いているに違いない。母は17年前に、癌でこの世を去った。病院のベッドで泣きながら「家に帰りたい」と訴える母の願いを、叶える事は出来なかった。家族でありながら母の異変に気付かなかった事や、苦しむ母の傍に居ることしか出来なかった無力な自分の姿が、後悔の念としていつまでも心の奥底に残っていた。

母の死から長い年月を経て、一児の母となった私が、看護の道を歩き出す事ができたのは「母を守る事ができなかった思い」と「我が子を守りたい思い」に支えられていたからだと思う。子育てをしながらの学生生活は決して平坦な道ではなかった。「僕と勉強、どちらが大切なの？」という子供の言葉に、何度も心が折れそうになった。その度に、子供を抱き締めながら、天国の母に「私の選んだ道は間違っていたの？」と問いかけた。

子供の頃、お腹が痛い時に、母が手でさすってくれると安心して痛みが和らいだ事を、今でも鮮明に覚えている。そして、今は母となった私が、母がしてくれた事を子供に繰り返す。母親は、子供の痛み・苦しみを自分のこと以上に受け止め、「この子の為なら」と懸命に看病する。看護の本質は「母親の子どもに対する愛情」・・・無償の愛・永遠の愛・利他的な愛だと私は思う。看護師には、不安や喜びを感じている人に寄り添い、「生きている」「生きていてよかった」という喜びを共有し、「苦しい」「辛い」という痛み・悲しみを分有することが必要なのではないだろうか。苦痛に直面している患者さんと向き合うことは辛いことであり、時には目を背けたくなることもある。でも、当の患者さんは、そこから逃げることは出来ない。どうすれば、その苦痛を最小にすることが出来るかを考え、実践していくことが看護だと思う。

私は、母を亡くしたことで「患者の無念さ・残された家族の心の痛みは時間が解決してくれる」と、簡単には片づけられない事であることを知った。その人の思い・苦しみを完全に理解する事は不可能かもしれない。しかし、常に患者さんのそばに居ることや、心の声に耳を傾ける事が、患者さん・その家族の気持ちを少しでも理解することへ繋がると思う。その人のそれまで生きてきた歴史や生き方・これからの生き方や人生観に自分自身を重ねながら、その人に少しでも近づけるよう努力することこそが大切なのだと思う。

看護師への道・・・それは天国の母からの贈り物だと思う。母から貰った沢山の愛情があればこそ、看護師として歩き出すことができた。誰かを思う気持ちの大切さを母が教えてくれたからこそ、看護の対象である「人」を好きになることができた。私は、より多くの患者さんに、母から教えられた「手の温もり」を伝えていきたい。